映画『武訓伝』、待望のＤＶＤ化

吉川　龍生

一九五一年初の公開から三ヶ月ほどで毛沢東の批判を受け、映画としての映像そのものよりも、むしろ「『武訓伝』批判」という歴史的な事象として広く知られてきたとも言える映画『武訓伝』が、二〇一二年三月ようやくＤＶＤ化され、広東大聖文化伝播有限公司から発売された（深圳音像公司出版発行）。中国国内では、三月二十二日に『新京報』が数ページにわたる特集を組んだほか、四月六日には『文匯読書週報』が一面トップで大きく扱うなどの反応が見られ、インターネット上でも大きな話題となった。『武訓伝』は文芸のみならず政治や経済にまで広く影響を及ぼした批判キャンペーンの材料であり、近年続々とＤＶＤ化されていく同時期の作品から遅れることもやむなしと思っていただけに、ＤＶＤ化が実現したことを喜ばしいと思うと同時に、このタイミングでのＤＶＤ化には驚かされた。それにしても、発売されたＤＶＤのケース左上に言い訳のように「供研究使用」と表示されているのを見るにつけ、『武訓伝』が公開後遭遇してきた暗い歴史に思いを致さずにはいられない。

映画『武訓伝』は、清末に実在した武訓という人物の一生を映画化したものである。家庭の貧しさゆえ学ぶ機会を得られなかった武訓は、字を読めないばかりに必死に働いて貯めたお金を地主に騙され、その上暴行を受けて昏睡状態に陥ってしまう。そして、昏睡状態になっているときに見た夢がもとで、貧しい家庭の子弟が無料で学ぶことのできる義学を建てることを決意し、物乞いや日雇いの仕事などをして少しずつ資金を蓄え、ついには義学を完成させるという物語である。新中国建国後に武訓の霊廟で、黄宗英（趙丹夫人）演ずる女性教師が武訓の一生について子どもたちに教える場面が、映画の冒頭と末尾に加えられている。そこには、共産党のイデオロギーに沿った内容にしようという意図も見受けられる。『故都春夢』『小玩意（おもちゃ）』『大路（大いなる路）』などを監督し、一九三〇年代の上海映画黄金期を支えた孫瑜が脚本と監督を担当し、同じく上海時代から『十字街頭（十字路）』『馬路天使（街角の天使）』

などに出演して人気俳優であった趙丹が、渾身の演技で青年期から晩年までの武訓を演じている。『武訓伝』は一九五〇年末に完成し、一九五一年初から上海・南京・北京などの各都市で上映され、好評を博した。しかし、同年五月には毛沢東によって批判され、大々的な批判キャンペーンが展開されることになる。その影響は、新中国建国後間もない中国社会のさまざまな方面に広く及んだ。その後、反右派闘争や文化大革命の際にも批判対象として持ち出され、文化大革命が終結するまでに、『武訓伝』に関連して批判されたり迫害されたりした人の数は計り知れない。

『武訓伝』DVD のパッケージ

最初の批判キャンペーンが始まってから、批判のための上映という形での上映は行われたことはあるようだが、正式な一般向けの上映は長い間行われてこなかった。文革後の一九八五年、胡喬木が公の場で『武訓伝』批判の行き過ぎを認める発言をし（発言内容は一九八五年九月六日『人民日報』はじめ各紙が報道）、名誉回復が図られるが、すぐさま広く一般に公開されるまでには至らなかった。その後、二〇〇〇年に上海虹口図書館でビデオでの上映が行われ、二〇〇五年には上海で行われた趙丹生誕九〇年の回顧展の中で中国電影資料館が保有するフィルムでの上映が実現しているが、上映に際しては多くの困難があったと聞いた。なお、日本では中国国内よりもかなり早く、一九九二年から九三年にかけて東京国立近代美術館フィルムセンターで「孫瑜監督と上海映画の仲間たち　中国映画の回顧」という特集上映が行われた際に、「特別上映」として『武訓伝』が正式に上映されている。しかし、東京での上映に際しても、日中双方のぎりぎりの交渉と妥協があったようだ。フィルムの完成から半世紀以上が経っても上映すらままならない絶対的タブーであり、デリケートな問題であり続け、DVD化されてなお「供研究使用」との予防線を張る必要があったところに、「『武訓伝』批判」の衝撃の大きさを思い知らされる。

実はこれまでも、研究者の個別の鑑賞という意味では、北京の中国電影資料館でも、東京のフィルムセンターでも、しかるべき手続きをして費用を負担しさえすれば、鑑賞は可能であった。しかし、そうした手段で鑑賞する人は限られており、DVD化されたものが即座に中国国内の動画サイトにアップロードされたことも含め、DVD化が鑑賞機会の爆発的な増大をもたらしたことは言うまでもない。「供研究使用」と書いてみせた発売元にしても、デジタル素材が一度流布してしまえばどのような状況になるかは当然想定していたはずである。

なお、今回発売されたDVDの元になったフィルムがどこから提供されたのかについては、民間の愛好家の所蔵フィ

ルムとするものや、電影資料館のフィルムだとするものなど、さまざまな憶測が飛び交っている。ＤＶＤの発売元は、今のところフィルム提供者の情報を公にするつもりはないようで、現時点ではどのフィルムが元になっているのかは不明である。しかし、筆者が東京のフィルムセンターで鑑賞したものとＤＶＤの映像とは一致していると考えられる。また、東京にフィルムを贈った電影資料館所蔵のフィルムも同内容と考えられる（筆者は電影資料館では「上集」のみ鑑賞したが、それとＤＶＤとは同内容であると思われる）。

ところで、今回発売されたＤＶＤのケースを開くと、Ｂ３サイズの『武訓伝』のポスターが折りたたまれて収められており、その下にはＶＣＤ全盛時代を思わせる二枚組のディスクが収まっている。二枚組になっているのは、元のフィルム自体が上下二集になっているからに他ならないが、そこからは『武訓伝』が製作段階で経てきた曲折の一端を垣間見ることができる。『武訓伝』主演の趙丹の自伝『地獄之門』（文匯出版社、二〇〇五年）によれば、上海中共地下党の方針に従い、新中国建国前の一九四八年当時、中制（中国電影制片廠）が計画していた反共映画の企画を潰すため、大規模で製作費がかかる長尺映画を中制で製作させて撮影場所や予算を奪う計画が立てられ、孫瑜が脚本を完成させていた『武訓伝』に白羽の矢がたったということだ。製作費をわざと高額にするため、趙丹も会社に故意に高額のギャラを要求し、紙幣の入った麻袋をいくつももらったと書いている。作品の長さには当初から理由があったわけだが、三分の一ほど撮影したところで中制の経営状態が悪化し撮影は中止になってしまう。

その後『武訓伝』の製作を引き継いだのは崑崙影業公司であった。孫瑜の自伝『銀海泛舟』（上海文芸出版社、一九八八年）によれば、孫瑜の反対にもかかわらず会社側の意向で上下二集にすることになったが、それは経営の苦しかった会社側が収入を増やしたいという目論みがあったからだった。せめて上映だけは上下通しでして欲しいという孫瑜監督の要望を反映して上映は通しで行われたが、チケットは上下二回分をとり、その分会社は潤ったという。

『武訓伝』の製作は、孫瑜が一九四四年夏に疎開先の重慶北温泉で、教育家として知られる陶行知から『武訓先生画伝』を贈られ、武訓の一生を映画にして欲しいという希望を聞いたところから始まっている。一九五〇年末の完成までには、社会情勢だけを見ても、日本の敗戦や国共内戦、人民共和国の建国という歴史的事件が挟まる。さらに、孫瑜自身も重慶からアメリカ、そして上海へと移動しつつ脚本を完成させ、撮影を進めてきた。製作段階だけでも大変な曲折を経て、当時の上海映画界を代表するようなさまざまな人材がこの作品を完成に導いたわけだ。『武訓伝』完成のために投入された予算や人材を考えるとき、『武訓伝』はある意味で一九三〇年代に絶頂期を迎えた上海映画の集大成の一つだったと言うこともできよう。

そのように考えると、これまで「『武

訓伝』批判」の『武訓伝』としてばかり評価されてきた『武訓伝』を改めて評価するためには、作品完成以前の経緯も見直す必要があることは言を俟たない。とりわけ、一九三〇年代の上海で製作された孫瑜監督の作品についてその映像を検討し、『武訓伝』とどのようなつながりがあるのか検討することは意義のあることだと考える。そこで、筆者はこれまで一九三〇年代の孫瑜映画に見られる身体性に着目して検討を進め、孫瑜監督自身が「幻思（ファンタジー、或いは楽観的なイマジネーションの意）」と呼ぶ概念を借り、「孫瑜映画のファンタジー」としてその特徴を指摘した（「孫瑜映画のファンタジー―その想像力とポリティクス―」二〇一一年十月、日吉中国現代文学研究会にて発表、来春刊行の慶應義塾大学日吉紀要『中国研究』第六号などに投稿予定）。孫瑜監督が一九三〇年代の作品で見せていた前述のような特徴を引き継いでいると考えられるのが、上下二集にする際に追加されたという夢の場面である。苛酷な現実が理想に向かって変化していくことを想像する、孫瑜監督らしい楽天的な想像力が見て取れる。この場面について最近では、『野草』第八十九号（中国文芸研究会、二〇一二年二月）で『武訓伝』の紹介を書かれている阿部範之氏も言及されているが、孫瑜や主演の趙丹が、映画化のきっかけになった『武訓先生画伝』とどのような出会い方をしているかなど、製作の具体的な経緯もふまえた検討がここでは必要であるように思われる。

いずれにしても、今回のＤＶＤ化によって『武訓伝』を鑑賞することが容易になり、前述のような具体的な映像についてより多くの人が議論する機会がもたらされたことは間違いない。夢の場面以外にも、製作過程で遭遇した問題を解決するために、他とは異なる性格の映像が加えられている印象を受ける箇所などもあり、脚本や批判キャンペーンの際のテキスト分析を通した、いわば「文字ベース」の評価や研究が、より具体的な映像を踏まえたものになっていくことであろう。「『武訓伝』批判」の『武訓伝』から、一映画としての『武訓伝』へ、という変化が期待される。長年の曲折を経て作品を完成させながらその後不遇のまま一生を終えた孫瑜監督や、武訓の青年時代から晩年に至るまでを渾身の演技で表現して見せた趙丹をはじめ、『武訓伝』の製作にかかわった全ての人たちが長年待ち望んでいた状況が、ようやくにして実現したと言えるのであろう。

（よしかわ・たつお　慶應義塾大学）

＊『武訓伝』ＤＶＤは東方書店でも取り扱っております（税込四、一五八円）。

♠